

「祖先祭祀」「隠居」「死霊結婚」といった特定のテーマを掲げて調査を積み重ねるだけでは、それによって得られた個々の事例に対する評価や議論が片手落ちになることは否めない。これまでの著者の研究の足跡において、「比較研究」「比較民俗学」への志向とともに、その地域の社会・文化全体を視野に入れた研究のあり方への模索があったことは重要であろう。そのことと関連してか、本書中の随所に、「社会的基盤」とか「基盤」「構造的基盤」といった文字を見出すことができるが、それらの指し示す意味内容は漠然としており、幾分残念ではある。

(A 5版362頁 吉川弘文館 1995)

#### 註

- (1) 石塚尊俊「納戸神をめぐる問題」(『日本民俗学』第2巻第2号, 1954年), 同「民間の神—とくに納戸神と竈神—」(『日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗研究大系』第2巻所収, 国学院大学, 1982年)。
- (2) 依田千百子「朝鮮の稲作儀礼—その類型を中心として—」(同『朝鮮民俗文化の研究』所収, 瑠璃書房, 1985年)では、韓国における収穫期の儀礼を、陰暦8月15日の「秋夕」当日またはその前後に行われる「第1次的儀礼」と、収穫後に行われる「第2次的儀礼」に大別し、さらに「第1次的儀礼」を①初穂, ②来訪者, ③年占の3種の儀礼に分けている。竹田は、このうちの①初穂の儀礼のみを指して、「第1次収穫祭」「第1次収穫儀礼」「初穂儀礼」といった呼称を用いている。

崔 仁 鶴 著

#### 『韓日昔話の比較研究』

川森 博司<sup>※</sup>

崔仁鶴氏は、韓国と日本の昔話の比較研究の土俵を作るうえで、常に先駆的な業績を積み重ねてきた。特に、『韓国昔話の研究』(弘文堂 1976)は、日本の研究者が韓国の昔話資料を比較のために参照しようとするとき、もっぱら依拠するものとなってきた。また、『朝鮮昔話百選』(日本放送出版協会 1974), 『朝鮮伝説集』(日本放送出版協会 1977), 『韓国の昔話』(三弥井書店 1982)などは、日本語で韓国の資料が詳細に紹介されており、日本の研究者が、韓国の昔話・伝説の伝承状況をうかがうための貴重な拠り所となってきた。今回出版された『韓日昔話の比較研究』には、崔仁鶴氏の1972~1987年にかけての昔話をめぐる論考のうち、日本語で書かれたものがまとめられている。

本書は、「I 昔話の理論」、「II 研究史および研究動向」、「III 地域研究」、「IV 比較研究」の4部から構成されている。ここでは、日本に拠点をおいて比較研究への視野を開こうとする立場にある評者の関心と呼んだ部分を取り上げ、本書から学ぶべき点について考察してみることにしたい。

IIの中の「韓国における昔話の研究史」という論考は、日本で民俗学関係の研究にたずさわる者がぜひとも精読すべきものである。特に、その研究の胎動期(1927-39)における孫晋泰、崔南善、李能和、鄭寅燮、宋錫夏、任哲宰などの業績について、われわれはその意味を深く考える必要がある。この中で孫晋泰の業績について、筆者は次のように述べている。

「孫は1930年郷土研究社から『朝鮮民譚集』(日本語版:評者注)を出版し、本格的な昔

※国立歴史民俗博物館助手

話研究の基礎を築いたのである。この本には、約10年にわたって自ら全国を歩きまわった採集の成果として、154話が収められている。孫はこれらを内容の上から神話・伝説類、民俗・信仰に関する説話、寓話・頓智説話・笑話、その他の民譚の四項目に整理・分類している。収録された昔話は、現在の採集資料と文献を比較する際に掛け橋の役割を果たすもので、その一つ一つが貴重な価値を有し、今やまさに古典的存在である」(p.30)

また、戦後の張徳順をはじめとする学者の業績にも、韓国における昔話資料の位置づけを理解するうえで、日本の研究者は大いに注意を払う必要がある。研究史を振り返って、筆者は今後の比較研究の必要性を強調している。

「口碑文学は口承されるものであるから、人間の移動によって一緒に移動される特徴がある。それゆえ民族間に同類のものが分布しているのが事実である。したがって、それが自生であるか伝播であるか究明するためにも、周辺民族の資料と研究のデータを援用したり実地にフィールドワークをして比較研究をしなければならぬ必要がある。このような比較研究のためにも基礎作業の一つである分類作業の定着が必要であり、可能であれば北欧のNIF(北欧五カ国が連合で共同出資して作った研究所)のように東北アジアで共同に適用できるタイプとモチーフのインデックスを作らなければならないことも期待したいものである。」(pp.64-65)

ところで筆者は、孫晋泰の『朝鮮民譚集』の出版に関わって、韓半島(朝鮮半島)における昔話の伝承状況の日本との違いについて指摘している。

「ここで一つ前置きして述べたいのは、韓半島における昔話の採集が日本のそれよりむしろかしいという点である。その理由としてはいうまでもなく儒教的な影響が日本より強かったことがあげられるであろう。朝鮮時代の500年間は、その政治や社会および文化の底に

ひそんでいる思想は儒教が中心になりつつあったわけである。それゆえ、貴族や中流以上の両班たちは荒唐無稽なる昔話などを語ることはタブーとなったわけである。庶民(下流階級)のうちでも男たちは昔話を語るべからざるものと信じ、夜に舍廊(サランバン)に集まると、淫談悖説に花を咲かしたのが実情である。だからこの系統の野談はその数が切りがないほどたくさんある。しかしながら、ごく少数に当る下流階級の婦女たちだけが昔話の語り手でもあり、継承者でもあったのである。しかし、これも非常に制限された範囲にとどまったといえよう。たとえば昔話を子守歌のかわりに、あるいは泣く子をあやすときにしか語らないということがある。」(pp.74-75)

比較研究においては、すぐに要素を並べて結果を引き出そうとするような例も見受けられるが、学問的な基礎をもった比較に進んでいくためには、このような伝承状況の違いには大いに注意を払わねばならない。韓国と日本の双方の昔話研究について長いキャリアをもつ筆者のこのような指摘は、後に続く研究者としてのわれわれが深く受けとめる必要があると思う。

このような昔話の伝承状況についての指摘は、次の「Ⅲ 地域研究」につながっていく。「韓国のイェンナル・イヤキ」という論考で、韓国における昔話伝承の特徴として、男女による語りの内容の違いを、筆者は指摘している。

「韓国の昔話の内容はおおまかに男女の話者によって区別が認められる。男は、昔話を伝説あるいは野談(世間話)類に語る傾向があり、孝行譚、または信仰性の濃いく人生と死をテーマにした昔話が多い。一方、女の話者は動物昔話、ままこ譚、天人女房系などほとんど本格昔話などを語る傾向がある。さらに、表現形式においても男女の区別が認められる。男はさきにも触れたように伝説風に語る関係

上、漠然とではあるが時制の前置きをする場合が多いが、女の場合は伝統的な語りの形式を保っている。このように、内容、語り形式の区別が認められるようになったのは、語りの場の関係から生じたのではなからうかと私は思うのである。」(p.163)

この男女による語りの違いという問題は、日本の昔話伝承においてはほとんど問題にされていないだけに、重要な指摘である。なぜなら、個々の昔話が意味するものは何かを追究するためには、それぞれの伝承状況を押さえたうえでの考察が必要であるからだ。このようなそれぞれに特有な伝承状況の中に位置づけて昔話を比較考察していくことは今後なされるべき課題であるが、ここでの指摘はそこに進んでいくためにきわめて貴重なものと考えられる。

「Ⅳ 比較研究」は本書の中心となる部分である。ここには、『火の神』型昔話の比較—韓・日・沖縄の資料を中心に—、「昔話の同郷性」、「韓国のトケビと日本のバケモノ」、「韓日狗耕田の比較」、「〈夜来者談〉と〈浜下り行事由来談〉の比較」の5編の論考が収録されている。

『火の神』型昔話の比較—韓・日・沖縄の資料を中心に—においては、火の種をていねいに取り扱う民間信仰を背景にして「火の神」型昔話について、韓国、日本本土、沖縄・奄美の三つの地域の伝承にもとづいて比較研究をおこなっている。まず、日本の伝承で「火種信仰が大晦日と結びつき、この習俗が昔話に反映している」のは、韓国と比べて特徴的だと指摘され、次のような解釈が示されている。

「大歳にまつわる昔話は、大歳の火以外にも前述した大歳の客を含め、関敬吾氏の『日本昔話集成』によれば11の類型があげられているほど豊富である。韓国の民俗のうえからは、大晦日の重要性は認められながらもそれにまつわる昔話が少ないのは、年が変わる大晦日

の観念が弱いからではなく、むしろ祖先を迎える厳しい儒教思想の影響とみられよう。大晦日とお正月は共同体の祭りという観念よりは家または家系の祭日として謹む日であった。

(中略) このように祖霊の来訪を見守るなかで、この日はよその家のことを口にするのは忌まれたのである。」(p.311)

火の種信仰を背景にした昔話は、「沖縄は火の神退治型および由来談の形式になり、本土においては大歳の来訪者の形式になっている。一方、韓国は致富談形式になっている」(p.312)。このようにそれぞれの文化圏ごとに特徴をもった形式になっているが、筋の展開の構造には共通のものがある。この共通性を引き出したうえで、地域別の相違点を解明していくことを、筆者は昔話の比較研究の課題として示している。

次の「昔話の同郷性」という論文では、筆者が自身の研究の位置づけを端的に示している。

「両民族(韓国と日本)の昔話を比較研究するためには、両国学者の共同作業が必要である。昔話は、厳密にいつて、国籍のない無形文化財である。総合的な基礎のうえで一つ一つの昔話の歴史を究明するためにはどうしても両国学者の協力が必要になってくる。だから、両国昔話の本格的比較研究はこれからの課題である。したがって筆者は本論で独歩的判断をできるだけ避け、ただ両国の昔話がいかに類似しており、両国昔話の比較研究がいかに必要であるかを主張し、これまではあまり韓国の昔話には触れていなかった日本の昔話研究者および昔話ファンに対して、問題点を提起しようとするものである。」(pp.319-320)

このような視点から筆者は、日本の「桃太郎」「花咲爺」「浦島太郎」「勝々山」「一寸法師」「舌切雀」の六つの昔話とその韓国の類話との比較研究を進めている。たとえば、日本の「舌切雀」と韓国の「ホンブとノルブ」の比較研究の結論は、次のようなものである。

「韓国では燕であるが日本では雀、韓国では兄弟の葛藤になっているが、日本では隣人になっている点が相違しているだけで、全体的構造からみて、この昔話は一つの根から発生した昔話であると思う。さらにこの系統の昔話の内容をみると、農耕文化と関わりがあり、その分布状態は世界的とはいえ、もっとも中国、韓国、日本の昔話が一致しているのは同一文化圏に属しているからではないかと思う。」(p.353)

また、特に韓国の伝承と九州地方の伝承の類似性が指摘されている。

「多くの昔話が九州地方と韓国との類似性が厚いという印象を筆者の現地調査から強く受けたのは、この地域が古くから韓国との係わり、つまり民族の移動、文化の交流などがあったからだと考えてもまちがいはないと思う。」(p.351)

ここで主張されていることは、昔話の研究においては、中国、韓国、日本をひとつの文化圏とみなすような国境を越えた比較研究が必要であるという点である。このような視点から「韓国のトケビと日本のバケモノ」という論考では、韓国と日本の昔話を比較研究する際の筆者の着眼点が、次のように述べられている。「韓日両民族の昔話を読んでみると、内容がまったく一致するかまたは部分的に一致するものが多い。したがって両民族の昔話がかつて同じ経路をたどって成長してきたものが多いように思われる。しかし両民族の昔話が形式、構造、機能的な面において類似性があるとしても、内容において登場する主人公などは大いに相違点が認められる。たとえば、韓国では葛藤をテーマにした昔話に兄弟葛藤が多いのに比べて、日本では隣の爺型が多い。さらに今ここにあげたトケビ話にしても、韓国はトケビ、日本では次にあげるようにさまざまな名称が用いられている。このような細かいところの相違点はやはり、文化的な差異、つまり民衆の文芸的嗜好の違い、民

間信仰の違いなどの反映ではなからうか。」(p.359)

また筆者は、「韓日狗耕田譚の比較」という論考において、韓国と日本における昔話の伝承の場の違いと、それがそれぞれ昔話の内容におよぼした影響について次のように述べている。

「日本の語りの場は囲炉裏であり、韓国はオンドルである。両民族の語りの場の構造とその性質からみて、囲炉裏は家族がともにする場であり、顔をお互い合せている限りなにかしゃべられるようになるのが心理的長所であるが、オンドルは韓国の家族制度からみて、成人と子供を分離させたことにもなり、子供は大体、母親と一緒にいるが青年になると、青年同志のサランバンに集まるのがしきたりになっていた。一部屋に家族が皆暮らすようないくら貧しい家でも子供と女は大人の話聞くべからず。右記のようなことが韓国昔話の発展を妨げる要因となった。」(p.392)

さて、このように韓国の昔話研究を基盤にし、そこから日本本土および沖縄・奄美地域の昔話伝承へと比較研究を進めた筆者が、その成果をこのように日本語で示してくれた。日本の研究者にとって、これは熱いメッセージである。筆者があとがきで「わたしの論文はそれぞれ課題が提出されただけで結論は見送られているような感じがする。そのわけは総合的・学際間による共同研究を済ましてからでなければ真の答えが出ないからではなからうか。つまりこの書は昔話研究における未来志向的課題のメッセージとしての性格が含まれている」(p.410)と述べている。

筆者のメッセージを受けとめれば、日本の昔話の研究はそれだけで完結できるものではなく、韓国をはじめとする隣接地域との比較研究に進んでいく必要がある。では、本書の呼び掛けに対して、日本の研究者はどのように答えていくことができるだろうか。まず、日本の昔話の研究を踏まえて、韓国の資料と

の比較研究に踏み入り、それを韓国語で発表していくという方向への努力が必要とされるであろう。評者の自戒の念も含めてそのように思う。また、昔話の研究は、類型の整理、構造分析のような段階から、語りの場や語り手の実践をとらえていく方向へと展開している。このような現在の研究動向にそくして、われわれは比較研究への展望を新たに組織し直していく必要がある。たとえば、本書で示された語りの場の歴史的位置づけの問題を、

日本の側の資料からさらに発展させていくことなどが考えられる。

筆者も学際的な研究の必要性を主張しているが、文化人類学、社会学、歴史学などにおける、より普遍的な問題設定との接点を見出したうえで、昔話資料の位置づけを考えていくことが、今後の昔話の比較研究における課題となるであろう。そのような方向へ向けてのはげましとして、評者は本書を受け取りたい。(三弥井書店 1995年 A5 判440頁)

#### 新刊紹介

### C. ダニエルズ、渡部武編著

#### 『雲南の生活と技術』

日本の民俗文化の原形を求めて中国雲南地方には数多くの日本人研究者が訪れている。雲南地方は生態系の差異に応じて、各民俗の棲み分けが行われている地方でもある。中国技術史・中国農業史専攻の編者が、漢族による開発史として把らえられてきた雲南少数民族の歴史に、それぞれの民族の農耕生活を軸とした物質文化の展開に焦点をあてることにより、生態的ニッチ(適応)を明かにし、共生の実態を探ろうとした日中合同の現地調査の成果が本書である。論議よりも基礎資料の充実を第一にしたとする報告書だけに、民具の実測図、写真資料を多用してそれぞれの民族の生活ぶりが描かれている。内容は田村善次郎「西双版纳少数民族の村寨を歩く」、渡部武「雲南地方伝統生産工具採訪手記」、C. ダニエルズ「西双版纳傣族の水車」、神野善治「雲南の魚と船」、印南敏秀「雲南の

生活空間と食文化」、李銳「雲南少数民族の民家の伝統と変化」、李曉斌「西双版纳山地民族の婚姻習俗と年中行事聞き」、(座談会)「西双版纳地方少数民族の焼畑をめぐる」の八章だてであり、各章末には運搬用具、鍛冶屋、竹の用具、狩猟・魚撈具、編み袋、諸職、大理白族の甲馬紙の民具抄録が付されている。編者による行動日程を見ると、一日単位の日程が多く、時間が限られた中での団員の集中した調査ぶりがうかがわれる。長期滞在調査がまだまだ許可されない中で、中国側団員による今後の補充や、一村毎の民具誌を望むのは望蜀ということになるだろうか。『農業考古』の伝統の上に中国での民具研究の進展を望みたいものである。

(佐野賢治)

1994.10刊 A5判 463頁 慶友社10,940円